

默秘

山岸一章

默秘

山岸一章



山岸一章●黙秘

昭和四十三年七月二十日 発行

定価 四三〇円

著 者 山 岸 一 章

発 行 者 藤 山 真 人

東京都千代田区神田神保町一〇三

発 行 所 東 邦 出 版 社

電話東京（二九四）〇四一八

振替東京八五三七五

山岸一章●黙秘

目次

幽霊助役	細胞誕生	陳述	黙秘	さよっぺ
------	------	----	----	------

5	21	55	89	211
---	----	----	----	-----

さし絵・装てい 箕田源二郎

幽
靈
助
役



国鉄大井工場の鑄物職場に、幽霊というあだ名の助役がいる。野田七蔵という名前だが労働者の間では、幽霊といったほうが通りがよい。年は五十五だが、首のふといがっちりしたからだに、目のきついほほ骨の張ったあぶら性の顔がのっている。野田は一日に何回か、きまって職場の中を見て回る。手をうしろにくみ足音をたてずに歩く。高熱の職場で夢中で働いている労働者の背後に、いつの間にか立っていて細い目を光らせる。そして知らない間に消えているのだ。息ぬきをしている労働者にも口をきくことはない。それだけにうす気味が悪い。だれがつけたのか、幽霊というあだ名はびったりであった。

野田は在職四十年になる。鑄物職場のメシであった。大学出の職場長は二年か三年で代わっていく。しかし東北の小作農のせがれであった野田は、百姓が田畑に執着するように、熱気と砂ぼこりの鑄物職場にしがみついていたのだ。小卒だけの野田が助役になれたのは、多分に運に恵まれたせいもあるが、病気ひとつしない頑健さと、ヒキといわれる縁故、くそがつくまじめさと、見かけによらぬこすからさ等々のおかげである。野田はまた四十五万人に四人という顕功章の受賞者として国鉄従業員の代表的な一つのタイプだ。制輪子の生産が戦後の電車増強のネックにな

ったとき、金型方式を完成して量産を可能にしたのである。鉄道八十周年の記念式典の席上で、高松宮から授けられたのであった。

正午のサイレンが鳴ると工場の食堂へ、三千数百人の労働者がいちどきにつめかける。汗びっしょりの作業服に塩の地図を浮かべたカジ工。よごれた油だらけの電車解体工、鋳物工、塗装工、旋盤工、木工、製缶工、仕上工、運搬工、事務係、検査係など。広大な敷地に散らばった二十いくつかの職場から、汗と油のにおいを混合させ、空腹で無口に、あるいはぎゃくに大声になって集まってくるのである。

東京とその周辺都市は人口一千万から二千万へ、無計画に際限なく膨脹する。その足をささえているのが一日平均四百キロメートル突っ走り、全国旅客数の五割にもなる七百万人の人を、一年には二十五億もの人を運んでいる四千両近い国鉄電車だ。損傷の激しい電車の検査、修繕を受けもって安全を確保している、地味な肝臓の役割を果たしているのが、東海道線が品川につく前に左側に見えるこの大井工場である。

野田は昔からの習慣で食堂にはゆっくり行く。その日はヒシキと野菜のごった煮にイワシの揚げものが一びきずつだった。野田が食べはじめると、待っていたように金型のボーション（一般にいう組長。鉄道だけの言葉だが、英語のボースンが東北流になまったらしい）金井佳吉が声をかけた。

「助役さん。ひと雨、ほしいですね」

野田はうなずいただけだ。金井は話しこもうとして考えておいたことを話してみた。

「東大へ行っている息子さん、お元気ですか。いまは夏休みですね」

金井は知らなかったのだが、その息子は昨年の安保騒ぎのとき、夜明けに泥まみれで帰宅し、野田と大げんかとなって、そのまま家を出たきりなのだ。だから野田はよけいに不機嫌になってしまった。金井はとっつきの悪さに困りきって、しかたなく本題に入った。

「助役さん。じつはお願ひしたいことがあるんですが、つぎの日曜におうかがいしても良いでしょうか」

「なんだね。ここではだめなのか」

「ちょっと、ここでは……」

野田は金井の用事がもうわかっていた。軽い硅肺病にかかったりして、万年技工の金井は職場長から退職勧告されていたのだ。

「職場長からあった話なら、おれにはどうしようもないぜ」

「そのことなんです。私はまだ五十一ですし、病気になる長男がじきに退院するので、働き出すまで、もうすこしめんどろみていただきたいんです」

「こまるな。おれに相談されたって」

「はあ。ごめいわくでしょうけど、何とかお願いします。じきに野田さんが職場長になれるんでしょう。それまで、何とか口をきいていただければ……」

口の達者でない金井は、「この通りです」と机に両手をつけて頭を下げてしまった。食器をかたづけはじめた主婦や、おそい食事の労働者が立ち止まって見ていた。

「金井。いいかげんにしろ。君はいい年をして若いもんとデモなんかに行くから、しょうがない

だろう」

野田は食事が終わると、突き放すようにいって、かまわず立ち去ってしまった。

国鉄の定年は五十五歳といわれているが、それは慣行であって、当局の判断で適当に扱われる。金井のように五十過ぎたばかりで勧告されるものも、六十近くまで働いている例もある。それが東京電力の労務重役などで構成されている諮問機関、国鉄要務対策委員会が国鉄の年齢構成が高いのを理由に、昭和四十年以降、四十歳以上の従業員を毎年一万五千人ずつ整理するという勧告を提出した。それから全国の職場で退職勧告が激しくなってきたのだ。それは十数年も新規採用せず、輸送量の増加を労働強化で切りぬけてきた事実をたなにあげての首切りであった。

野田が事務室に戻ると、まだ二十七歳の職場長は学生気のぬけない横顔で原書を読んでいた。その東大出の職場長と金井の話したことから、野田は息子とけんかしたときのことを思い出していらいらしはじめていた。そのうちに始業のサイレンが鳴った。野田は気をまぎらせようとして、机の上の施工券に目を通した。そして金型の制輪子がこの一週間も、ガンバラ（鋳物用語で不良品）が多くて生産目標に達していないのに気がついた。野田はすぐに金型の工高出の青木作業係を呼びつけた。そして気持ちがすむまで、ねちねちと文句をならべた。

青木がうんざりした顔で現場へ去ると、野田は壁にかかっている歴代職場長の名札をながめながら、しぶい茶をすった。その最後に自分の名札をならべるとき、字は習字をしている浅井作業係にかかせるつもりだ。

やがて時計が三時を示した。労働者がダレはじめるころだ。野田は幽霊の山手線とかげ口されている、例の職場見回りに出かけた。特に異状はなかった。野田は最後に道具番の小屋に入った。

道具番の井上は長野工場にいたとき共産党員であつた。レッドパーシ前に夜学へ行くことを理由にして転勤してきた。そのとき党を売ってきたことを野田は人事係長から聞いて知っていた。井上は日大の夜間経済学部を卒業すると、また組合に野心を示し、まず鋳物の分会長になったのだ。道具番の小屋は外から見えないので、野田の取りまきからも聞けない組合の動きや労働者の動静を井上から聞きだすのにつごうがよかった。

「井上。金井が泣きごとをいいに来てね。もがいてるから組合の問題にされないように気をつけろよ」

「あのじいさん。心がけが悪いんだな」

井上はニヤニヤしていた。

金型組でもめているという知らせがあつたのは、その日の終業近くであつた。野田が行つてみると、機械を止めた労働者が十五、六人で青木作業係をとりかこんでいた。

「何してるんだ。まだ終業のサイレンは鳴ってないぞ。仕事をしろ！」

野田はいきなりどなった。労働者はさっと口をつぐんだ。力をえた青木作業係が「早く仕事にかかれ！」とつづけた。そのとき、

「でも」

といつて一步前へ出たのは一番若い町田であつた。野田の前でも平気でアカハタを読んでいる民青团員で、じつは入党したばかりのホヤホヤの共産党員でもあつた。溶鉄待ちの息ぬきの多い型場から、機械にしばりつけておこうと、二カ月前に金型へ配置したばかりの青年だった。

「でもとは何だ」

野田は思わず怒気をふくめた。野田に口答えしたのはパーシ前の黨員分会長だけで、もう十年もないことだ。

「でも、金型の作業量はとりべの数できまっています。もし青木さんのいうように完成品の数でやるのでしたら、組合と交渉し直してください」

ドモリギみだが悪びれない町田の発言で、散りかかった労働者もふもとどまった。金型は生型とちがって型をつくる手間も砂落としの手間もいらず、いくらでも生産は上がる。しかし数百度に熱した金型に密接して連続作業する労働者は、高熱と労働過重で倒れるものが続出した。それで支部の問題となり、トン数、現場ではとりべの数で作業量が協定されたのである。それで野田はことばにつまった。つまったまま町田の顔をにらみつけた。ボーションの金井は食堂でのこともあり、ことばだけはとりなすような調子だが町田と同じことをいった。

「助役さん。若いものの態度のことは私からも話します。作業量のこととは今まで通りのことにして、ガンバラを少なくするように、みんなで研究してみます」

それは聞きようで、金型を発明した野田へのヒニクでもあった。野田は高圧的にいった。

「青木が何といったか知らないが、こんなさわぎをすると、ただですまなくなるぞ」

その場はそれですんだが、この小さな衝突のあと、金井と町田は急速に親しくなった。金井は町田にすすめられてアカハタ日曜版の読者になった。有名な経済学者を迎えて、職員クラブでひらかれたアカハタ読者会にも出席した。五十人近いアカハタ読者に紹介されて金井は自己紹介した。

「昭和四年ごろでした。私もみなさんより若くて、電車庫の社研に関係したこともあるんです。



それが弾圧されて、工場に配転されてからは、もう三十年も見ざる、聞かざる、いわざるの骨ぬきで、制輪子みたいにわが身を削るより能がない人間になって……」

金井の話でしんみりしかかったのを、弁ちゃんというカジヤの青年がはね返すようにいった。
「おっさん。じゃあ、大井工場の休火山だ」

休火山とはアカハタの連載小説にてでることばだったので、みんなどっと笑った。それでも金井はみんなから大切にされた。経済学者は、世銀からも融資される東海道新幹線工事費千七百二十五億円に、二百四十七億円もの利子が払われる例をあげて、独占資本の食いものになっている国鉄五カ年合理化計画の本質——という題で話したが、話す方も聞く方もしんけんだった。そのあとで工機職場の分会長が、職場長と集団交渉して、強制退職をはね返したときの模様を、身ぶりおかしく話して笑わせた。どの顔も、デモやビケの先頭に立っている明るい青年たちであった。

三十六度をこす暑い日がもう十日以上も続いている。鋳物職場の便所から見える東海道線の土手の草は、焼けつく日ざしと土ぼこりで白っぽく見える。小便にきた野田が水の切れのわるくなつたせがれをふっていると、分会長の井上がきて耳打ちした。

「金井のおっさん。とうとう組合の問題にしてみましたよ。早いとこ、希望退職にさせないとめんどうですよ」

「ちよっ。しょうがないヤツだ。あいつは昔、運動やっていたヤツだから、ネコかぶりしていても、こういうとき、退職金割増しというエサもきかないんだ」

「へえ。あのおっさん。昔、やっていたんですか」井上はゆだんできないという顔だ。

「それで職場長も手を焼いているんだが、うまい手がないかな」

そこへ事務係がかけてきた。

「助役さん。さがしましたよ。いま事務次長から電話があって、昼飯をいっしょにするから、認め印をもってくるようにという話でした」

聞いていた井上が笑いながらいった。

「昼飯と認め印か。クイズみたいだな。お答えは頭功章助役の職場長に進級ですね」

「ちがうよ」

野田はとぼけたが、まんざらではなかった。

事務次長の沢田は本庁の職員局長の右腕で、技術系の工場長より実権をもっている特権官僚のひとりだ。彼は着任するとあいさつがわりに、組合掲示板や食堂放送などの組合への便宜供与を断った。つづいて「時間外および休日労働に関する協定」に、戦時中のような改悪案を示して無協定状態だ。それは五カ年計画の工場の改築を時間外労働で遂行させようという腹なのだ。支部委員長は誠実な旋盤工だったが、共産党排撃に血まなこな連中のために支部は有効な反撃をくめないでいた。その間にも写真入りの当局側のPR紙を発行するなど、沢田は従来の家族主義的な労使慣行を片っぱしからこわしている。現場長からも恐れられている男だった。

野田はなんども時間をたしかめ、早くもおそくもなく自転車に乗って職場を出た。コンクリートの路面は焼けきって人影もまばらだった。本館の裏で自転車を降り、次長室の前になると野田は兵隊のように緊張した。半ソデの白Yシャツにチョウ・ネクタイの沢田は電話をかけていた

が、野田を見ると手をちょっとあげて待つように合図した。窓ぎわには大型の扇風機が音も立てずに回り、白いレースのカーテンをゆすっていた。じきに女子職員が鰻重を運んできた。電話の終わった沢田は、

「野田君。工場長室の方が涼しいから、向こうで食べよう」と立ち上がった。

工場長室はルームクーラーで鋳物からきた野田には冷たすぎた。室はかなり広く、飾りガラスのシャンデリアがぶら下がっていた。「こだま」号の精巧な模型と、工場の改築模型がガラスケースに入っていた。壁には電車の出場台数を示すグラフが急上昇を示している。沢田はさっさと工場長のイスにすわり、野田にはソファーをすすめた。

「君、認め印を持ってきた？」とたしかめてから「まあ、食べながら話をしよう」

沢田はそういつて肝すいのついた鰻重のふたをとった。その手に二十万円もするローレックスの腕時計が光っていた。食べ終わると、においの高い両切りの外国たばこに火をつけ、何気ない調子で話しはじめた。

「野田君。じつはね。君に今なら良い話があるんだがね」

野田は沈みすぎるソファーにおよび腰になっていた。

「川崎にね、五十人ばかりの鋳物工場があるんだ。もちろん鉄道用品を作っているんだが、そこで工場の監督をできる人をさがしているんだ。君なら適任だと思って、口をかけてあるんだ」はじめ、なんの話かのみ込めなかったが、すぐに退職勧告だとわかった。そうわかると血が頭にいきなり逆流した。両ヒザがふるえだした。からだ中の重力が消えてしまったように感じた。